



日本のNGOとして、国連総会で2016年以降の開発目標について提言する大橋正明JANIC理事長(中央)



国際協力の担い手たち

認定NPO法人 国際協力NGOセンター(JANIC)

NGOを支える縁の下の力持ち

開発途上国の人々に寄り添い、課題解決に取り組む国際協力NGO。
認定NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)は、
NGOと市民の懸け橋となり、日本の国際協力を支えている。



カンボジアで子どもの教育支援に取り組むNGOを視察する山口誠史JANIC事務局長(左端)



近年、注目を集める企業の国際協力。ジャニラボではNGOと企業の連携事例も紹介



ジャニラボの2日間で学んだことを振り返り、今後の目標について話し合う参加者たち

NGOの活動を支援するNGO

蛇口をひねれば、透明な水道水が出てくる。学校に行けば、栄養バランスの取れた給食を食べることが出来る。日本で暮らしている私たちにとっては、どれも当たり前のことだ。でも世界には、きれいな水や食べ物

もなければ、働き口もない、そんな生活を送る人たちがたくさんいる。その数はなんと55億人。彼らの力になりたい。そんな思いを胸に、現地に入り込んで活動するのが国際協力NGOだ。現在、日本にある国際協力NGOは400以上、その活動範囲は世界100カ国以上に広まっている。貧困削減、医療支援、教育支援、環境保護…。やるべきことは盛りだくさん。どんなへき地にも自らの足を使って入り込み、現地の人々に寄り添いながら活動を行っている。

国際協力は誰でもできる!!

市民による草の根レベルの協力こそNGOの強み。JANICでは、NGOに関心を持つ市民を対象に、国際協力のトレンドやNGOの仕事内容などを学ぶ2日間の集中講座「ジャニラボ」を開催している。NGOのことを理解し、一緒に活動盛り上げてくれる人たちの増やすのが目的。学生から社会人、シニアまで、参加者も多種多様だ。

「足のけがが原因で破傷風にかかり、亡くなってしまった子どもがいます。こうした死をなくすためにできることは何でしょうか」

まずはグループに分かれてその問題について分析し、どうすれば助けられたのか解決策を考える。さまざまな意見が飛び交い、ワークショップはいつまでも白熱する。参加者の一人、山梨大学

3年の本元里奈さんは、「一見、医療の問題に見えても、貧困やインフラ不足が影響していたりと、開発途上国ではさまざまな要因が絡み合っている。職業や年齢が違う人の考えを聞くことができ、発見がたくさんありました」と話す。海外プロジェクトの立案を疑似体験することで、現場の苦労ややりがいを実感できるプログラムだ。ワークショップの次は、NGOの活動について現役職員が紹介する。「途上国が国際協力の現場だと思う人は多いのですが、実は日本国内での広報活動や資金調達も活動のカギ。営業や経理の経験を持つ人材も求められています」とJANICの伊藤さん。自分の強みを生かして、やろうと思えば誰でも参加できるのがNGO。ジャニラボではそんなメッセージを伝えている。参加者はその後、NGOに就職したり、大学院へ進学したり、CSR(企業の社会的責任)活動に携わったりと、それぞれの国際協力の形を見出しているようだ。東日本大震災で地元が被災した横山和夫さんは、「約25年勤めた会社を退職し、NGOで復興支援などに携わりたいと思っていたのですが、全く経験がなく採用されませんでした。今は、ジャニラボで紹介してもらったNGOで復興に取り組む日々です」と目を輝かせる。NGOと私たちを結び付けるJANIC。これからも日本の国際協力を支え、世界を変える力になっていくだろう。



毎年10月に東京で開かれるグローバルフェスタは、JANICと外務省、JICAの共催(撮影:久野真一)

しかし日本のNGOの規模は、世界的に見ると小さい。欧米諸国では大企業並みの資金や人材、影響力を持つNGOもあるが、日本ではまだまだこれからは。誠実さやきめ細やかさなど、日本人ならではの強みを現地の活動にさらに生かしていくにはどうすればいいのか。

こうした課題に取り組むべく1987年に設立されたのが認定NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)。いわば、NGO

※毎年春と秋に開催。詳細はwww.janic.org/event/janilabo.php/まで。